增補訓蒙圖

下

和書門
類 二七二二七
號
函 九一
架 八
冊 三

内閣文庫
和書
類 二七二二七
號
冊 三
函 二一〇
架 四
(三冊)

内閣文庫
番號 和 27227
冊數 3 (3)
函號 210 5

綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

頭書増補訓蒙圖彙巻之十五

明治二年購求

蟲介

此部ハ野草にをびゝゝの蟲川谷よりひ甲介わる虫の類をもらすこと

○亀 西肢ひさ
ほそ多くゝる小さ
ゝ〳〵 泥血血涸
とゝ三十年也
の毒を啖て治と
○鼈 熱血を止
陰を補ひ婦人の
雑産腰痛を治ス
○鱉 痔漏を治ス
虫ところを多く含

〇蟹い一名を蟹甲
とつくがざめなり
〇蟹い一名を蟹蛸
とつくふ児のつくる熱
氣ふーー
〇螺い瘰癧結核
ひ〇のうち鬱氣
をそのひざる紙後
羸蟲同
〇田螺いふ便を利
ーー目の痛を治を
〇蟹い血をさんー

ーーー

と解と海蜥尖
螺螺蜥いにる
○蛤い五勝とうるか
ー酒とうるー胃
とひーき帰への血
塊ふー
○蛸い五臓とうる
かー胃ふをうるか
にー中と温め食
と消し陽とおとを
○蜆い胃ふひーき
乳とうー目を
わとうふー小便
と利ー脚氣酒毒

と治と
○蚌い渇とあ熱
とのとを酒毒と解
ー目ふわーふー
帯ふー蜂蚌同
馬刀
○貝い汁とそうわ
ハ目のうーとを茶
に合ー煮て食いん
痛と治を海肥同
○蟹い虚とうるか
ひ痢と治ー胸中
の熱いきふるう
○蛎い虚損と治

中てこのくすりく
くすりハ酒後の熱を
さまと
○鰒ハ精ぶすり卵
と炒くゝ五淋をうし
肉ハ胃をふし
風熱労極やすし
○車渠ハ神とやとん
緒の茶毒と解を
能毒あるゝひと同
○淡菜ハ虚労精を
ふやく腰痛疝氣帯
下にうゝ久く食ん
ハ人の髮ぬる

○辛螺ハ死尸遊
出ふせにくく食
べし
○梭尾螺 未考
法螺貝ともかく
○玉珧ハ巧用蚌
に同し一多く食
すきハ風紙をを
を蟹蜆ともく
○帽貝ハかくら帽
子に似てう能毒ハ
いまだつまびらかな
らず
○海燕ハ五温ハ

てゝ之を用ひて汁に煮てゝ食ス
一名陽遂足又海盤とも云ス
○寄蟲い頼名を
法一心志ゞ云ス
ちゝを
○海膽い祇毒ス
だつゝゞ
○郎君い婦人乃
ゝんゞんふゝふ
ゝゝゝゝる砌の
中人ゝゝゝゝ

○蛍い腐草ス
爛竹の根化し
ゝゝゝる之の
大史氣を抱て化
をゝつゝく出ゝゝ之
○蓑い蟋蟀とも
蜻蛉とも云ス蓑の
蝗に似て大ゝ補之
の末よいづる
○螻い土中の泥ス
ゝゝ之ゝゝゝ
一名土狗又い石蒜
とも云ス
○蟷螂いかゞ

足仲長にはさどいの
ろくれい臂とろく
○絡線いきりぐ
をくもい一名貽
くくれいぐとりくも
此ぐひなり
○螇蚸一名蟿
蚤しいくくく
むしゝ俗ふちろう
ちやうむし
○竈馬一名竈
雞ちいくくち丸く
脚長ゝ竈のか
ちろふちむ

○蜻蛉一名豆四の
つぐさ長せぐとと
んでひゝ爪とう
食ふ補の夫ふるとやん
まとこ
○赤卒一名ぐう
の久あるさのうう
俗ふわちやんまとこ
黒やんひゝと喉渾
と治を
○蟲冬蟲一名稻ふ生
と蟻同
○蜻蛉一名冬蟲
斯いなごに似ぐう

○蝶ハ蚕化して
ゐるの麦化して蝶
となる風蝶ハあげ
て胡蝶蛺蝶野
蛾同
○蠅ハ春足ふて縄
となるかくちとなると
よろて虫てんふ亀の
字となる爛死の円
よりなるなど
○金亀ハ大さ五豆
のごとく夏夢草
乃中にすむと
○燈蛾ハ燈となる
ふと飛蛾とも燭蛾
ともいひなり
○馬蜂ハ蚕の大さる
ものなり夏くろ
○叩頭ハくろくて
ひとつ虫
ともいふ
○蛤ハ七月の末よ
りすむと声蚕風の
吉のごとく廣野ふ
すむ
○金鐘ハ名金鏡
叩とも月鈴ともも
いふなり

○蠻金虫いろく声く
つのあふ枝くりろ
て名づく
○斑蝥ハ人ふた毒
なるを斑猫くもまと
○絆蠻ハ水上ふ花ど
虫どとる絆蝶同
○髑髏ハ一名天牛
ともいふく髮とく
ひくる目のあふ二
角あり
○蓑虫ハ一名木螺
結草といふ
○蜂ハ腐菌化し
鋒のごくとて蜂
といふあり
○蟲ハいろふて木
中ゐて木之芯ふ
くくふ本ふて之蝎
といふ芯とくくふ
蠋といふ
○蟢ハあくとく
りあり蝍蛸同
○蟬ハ地虫化して
るるるくて唱の
んで食ひど
○蝸ハ池澤草樹の
ろふけどめくる螺

に似く文白く角あ
○蚕は大なる紙本
蚕として丈つたる紙
に似く文黒く蚕と
して文ろて文づく
○蛾は蠶化して蛾
となる牝蛾の形也
○蠅蝨は蠶そろう又
螺羸とも細腰蜂と
も蒲芦とも又俗
ふしん細我蜂
○氣蟄は一名行夜
つまさ短して赤く
形也

○蚋は田野小せし
面の赤淡き形で人
の肌とさすと其わと
く愈くゝ
○蚊は子々虫化して
なる約脚はやぶん
○子子は水
くさりてはと化し
て蚊となる一名釘
倒虫
○蛙は惣名かりね
ぐと色かして黄ふ
紋ぐ文紋ぐと云
なり変色なり水

中に位て久青きと
あるは久しく久赤
きと赤く久きとの人
毛ど小児ふ食色
めそう
○蝌蚪い墓のみ
水中にはと蛞本
活東並同
○蛭い大なる牛馬
蛭といへとく人の血
とをとる
○蠼螋いうちむ
でふ仰く久黑し
人の祝よりすと
が人きく牛馬と
○蜈蚣いせるる黑く
みどり久足あるく
腥臭あるさくれる
人ハ烏鶏の尿又ハ
大蒜とあるべし
○蟾蜍ハ腹白く黑
き紋あるせるるふか
んぎあり油ハ蟾
酥とて人薬ふ用ゆ
○蝦蟇ハせるる不黑
點あり身ふにて
よくぶる化しく
鶉とする

○蜘蛛はむそ
て足ぶし毒あり
人の耳に入るゝ
ふ
物脳をくらへ入べし
○百足は長さ七八分
足黒し足百ありる
一名馬蚿
○蠓は面ふくろく
生じ陽気にて死
蠓ぶくれ時は風吹
寒ぐるぶきくろく
面ふくろ
○蚊は人の腹中にて
かくれ出るなり蝱同

胃胃の湿熱なり
○蛆は腐肉のあるに
はなれ魚鼈畜獣の
肉のうちにはなれ新
の中ふもとく郷同
○蠐螬はうち蜀蛸の
ぶし樹根はは蠹
土の中にはなれ身に
うく久白し蠐螬
同ふく黒きあり
○蚯蚓は面ふくろ出
ふくくさには疾ふく
○蚓蜒は一名蟺蝓

虫とつくるの亂婦
ともいふ
○蟬の書中の白魚
かり一名蛸と云俗
に蠹魚といふ
○蚤の床下云中々
ゆきど
○虱虫の人の身ふるく
髪ふるくるくるくるもの
ふるくるくるかるもの
○蟻の大なるを蚍蜉
といふ小を蟻といふ
つまん君臣の義あり
故ふ義の字とく

○蜘蛛いぢくらぐも
と花蜘蛛といふ夏くも
くもと蟷螂くもひも
しの大昊くもとそ
わくるくもとび蜘
○蚕蟲の系と土虫なり
三ぐとび俯ーー三ぐとび
紀二十七日ふーて老
黄帝のえ妃西陵
氏始て蚕蟲とー
うーて糸紙他
○蛞蝓のーく糞土
とうて去とおと
糞虫同

補

○土蟲ハ蛭ふれて及
其ゆゑ頭耳うきの
こと〳〵俗ふみくゝ蛭
もつハ此虫大毒あり
○木虱ハ木竹ゝ生
ゞ虱ふれくまく
まく疣ゆゑ壁
虱同俗ふつハたふと
○水蚕ハ一名水虱と
ハ湿地の土中に生
をゝくちゞ目眩に
つけくゝ
○水馬ハ一名水黽と
ハ水上におゝく水

かゝる蛇ぬけ蛇退
黑燒ふて酒ゆゑ用る
ハ雅産ふゝく
蟬蛻ハ蟬退とも拓蟬
たゝく粉ゆゝて酒ゆく
ゝ耳なゝ汗ゝ治を
○甲ハ亀の甲ゆゝむ
ゝハ亀ゝやゝて甲乃
役ゝゝを吉凶ゝ
ゝ手ゝゝ毛ゝ亀
トゝゝゝ茶ゝ用る
ゝハ男女補ゝ癈血
ゝ消ゝゝ敝甲癈
毛敝ゝ腫ゝ消ゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

介ハ鱟の甲なり○蘭ハこんぞうひて眉とにてせ綿とする○蛞蝓ハ一名黒髯虫とゝ
木上にはゞんとゝをでゝきてゝむ○蚨蠟ハ樹上ふけゞ行こと指ふて戸ゝとゝるゞ○鼓蟲ハ名鼓母虫と
いゝ水中にはゞ久黒くふゝ○蛞蝓ハ二角あり蝸牛に似たり一名土蝸とゝ○蠑螈ハ土窟の中に
とゝむ一名蛟蝎とゝ○ゝ有○壁錢ハ壁戸多ゞのゝふゝ一名壁鏡とゝ○壁蘚とゝ
○蠅虎ハ一名蠅豹とゝ○蠅蝗蠅豹並同○雀蹇ハ一名蛞蝓房とゝ○ゝ
木の枝ゝあり一名蟷蜋房とゝ○ゝ○蜂ハ蛇の大なるゝのゝ深山廣野にすむゝと
のびあり○蛇ハ草中にゝゝ蛙を食を蛇ハ惣名あり○蝮ハ蛇ハ名みゝゝく黒茶色あり
おとゝひ茶ふゝゝらゝ口とゞゝと毒ゝあゝてゝくゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝ反鼻蛇ゝゝゝゝ○烏蛇ハ
身黒くひゝゝゝ頭ゝゝく眼ゝゝゝ烏梢蛇ゝゝゝ黒花蛇ゝゝゝ○銀蛇ハ長さ一尺ばかり一名
錫蛇又金蛇とゝ○兩頭蛇ハ二頭ハ口目ゝゝ毛ゝゝれゝ不吉なり一名越王蛇とゝ○岐首蛇ハ首
ゝ岐れる蛇なるを根首蛇ゝ書てゝふ毒ゝり鰌ゝゝゝ○蜃ハ蛇蟻なり枯木ゝりけゞ
○吉丁虫ハせゝゝみどりにゝゝとのゝゝ此虫とゝとりて身ふもふゝ人と愛ゝ媚ゝゝ○芋蟲
芋の葉にはゞ○蛞蝓ハ木の葉ゝゝゝゝて枝と食粘と○蛸虫ハ糸の中

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゐびゝ同
○滑蟲 一名蜚蠊
とゝ入うほどの名てゝ多
補同 あそこ入ゝ
○殼 蚌螺の鄂のゝ
の類名也 蛤のゝ
略粉とゝ入 焼て活
いのちゝ 甲香とゝ
蠣とも書 ゝ入
鰒の貝のゝ
同の蒲 活
みかき貝のゝ 牡蛎
ゝ 蜃
○蛻 蛇蛻 へびの

頭書増補訓蒙圖彙巻之十六

米穀

この部ふゝ五穀の類をとゝ
くひ物乃きゝひと記を

○粳 氣とき 胃の氣と和
中と補ひ 腎精とき 腸胃とき
○糯 中と補ゝ氣とき 脾
胃とゝ氣とき 虚
寒洩痢とゝ
○粟 腎氣とやゝなひ 脾
胃の熱とさうゝ便と利し
反胃と活と
○稷 氣とキゝ不足と補ひ
熱とのぞき中と安く 胃と利
し血とさうし 暑とゝ解と
○稲 禾同かていね

稗は多く苗は多く苗代にもいく

○稗は中をおさめひ氣をもつて腸胃をわつて飢をとゝのへ

○麥は虛をおさめひ血脉をさうんみて五ざう充実して新らたに益

○蕎は腸胃を実して氣をとゝのへ積滯を和して熱腫風痛を消し

○菜は食を消して氣をとゝのへ毒を解して熱をさう毒を解し腹滿泄瀉をとゝまる

○麻は女人經候通ぜずけんがう金瘡門痔を治して惡血をとる

○豆は氣をまして腎をおさめひ胃充をとゝのへ中を和して小便しげしを

○豌は小便を利して腹滿をとゝまりさう消渴を治して吐逆を治す胡豆蹕豆からびふ同

○菽は水腫を治して惡血をさんして脾胃をとゝのへふして酒病を解して胃中の熱をとる

○荅は水氣を下し濃血をもつて小便を利し膜満消渇を治す

○蕓は中を和し氣を下し咽をやめ入ざるを

あざなひらくらん酒毒を解す扁豆籬豆眉豆

かしび小同

○胡麻は氣力をまし肌肉を長し筋骨をつよくし大小腸を利し耳目をあきらかにす

○嬰粟は風毒をとる邪熱をきい疼を治し五臓を治し

○蜀蝟豆は胃をとろかし膀胱を和す一小胡豆也

あづく

○玉黍は氣をまし中を和し津をとろかしぶんを利す

○蜀黍は中を和し腸胃をたすけ津をとろかしぶんを治す蘆穄萩穄同

○刀豆は中をあたゝめ氣を下し腸胃を利しちやうを

とめ腎をまし元をあたゝめ

○黎豆は中をとゝのへ胃をまし小便をつうじ貍豆

虎豆かしびに同

○燕麥はわせ平どく

なし　飢とをくひ腸をか

ゆるふを一名雀麥ともいふ

○穗いねのかゝり茎を

のぎ秕ぬかひるせ今按どく

ふみこさ

○藁こうかり禾稈禾

穰稻草かしびに同稈

心こうもべ稭藍秸並同

○穀ゆこ禾麻粟麥豆

あまめ瓜五穀として種を

たゝ稈いをうねゝ

○其いまわぐかり蹠同

魏の曹植詩ふつをう

○莢いまわかやかり

豆角かり藿いまわかれを

かり馬こを瓜ふ

○饅頭いりしい肉餡とも

ちひし幸かり小豆餡

のりの瓜素饅とて餡

かたりのと蒸餅とて

今い新製品くかり唐

饅頭わひい羹餅饅

頭かしいりのかり

○飯いひかりうめし

強飯いこいひ赤飯いかぐ

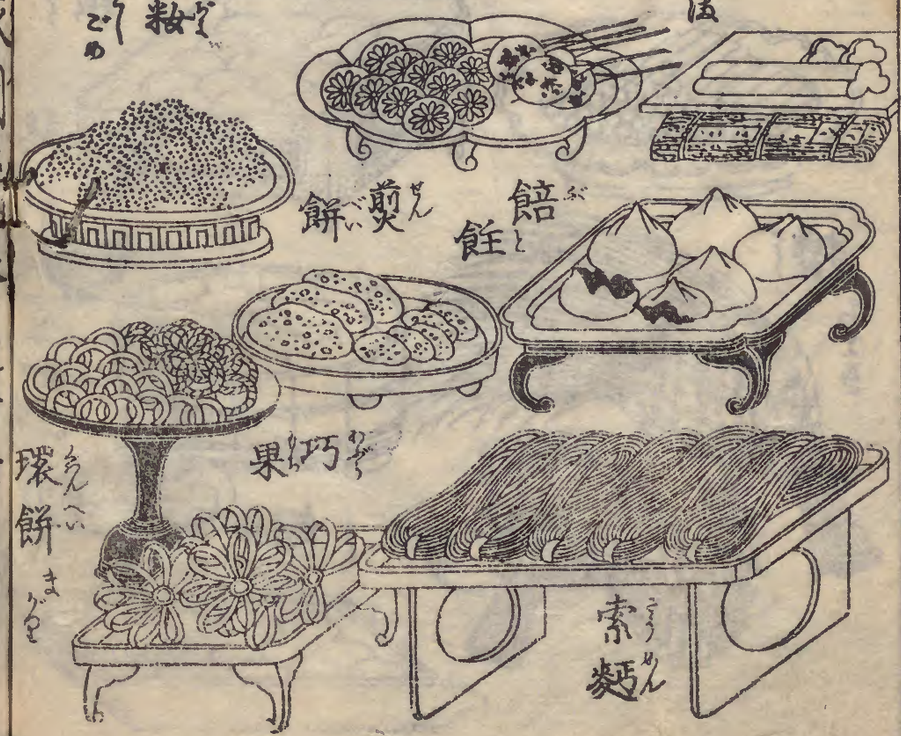
きめし乾飯いかりいひ水

飯い湯づけめ柿麥飯い

ひさぎめし栗飯いかこの也

○餅いろ〻麩餅なると
糯ハ粉餅ゆう團子なると
飯團ハかしとゆう栗餅を
わとゆう艾餅ゆうだゆう
○糖ハあめなり飴同濕糖
ハちるあめ錫ハかしあめ也
とゆふ老人とやーあめ
一種也黄蕨と名づくる
のを當時葉月に專
小児ゆ用ゆ
○糅ハちまきゆう粽同ゆ
角黍とゆう楚の屈原を
つとゝぶるゆう事とゆう
古ハ葦の葉にてつゝみ五色
の糸ゆて巻ゆゝ今用
ゆる笹の葉ハ腐中ハよ
ろしゆうどとゆう紙ゆわく
けゆ如ゆしとゆゆゆゆう
○索麺ハひやむぎゆう
一名索餅とゆう温飽
蕎切冷麦などゆう也とを
べて麺類ゆう
○餡餅ハ俗ゆ伏兎とゆう
つゆぶゆわげの餅ゆう油
堆ゆつく
○環餅ハまるとなりわぶ
らわげの菓ゆゆう糅
餅膏ゆも糅寒具ゆも
ゆう巧菓わぶらゆ

○酢漿いとなんかうまき
載とも書べし俗よ洲潰
しゆくなと
○焼餅い賢とも書べし
串にさしくるをこがくらい
又まるのくちにつくして鶏
ゆたと名づく
○粔籹いをこめかう糯
とりて飴中くゆくわくる
ちりと俗よ奥米とりけを
加まと飴おこりとつひかと
わるく岩おこしといへ
○糞餅い餅とのくわく
糞わづくるなり又鍼
餅とも書べし



頭書増補訓蒙圖彙卷之十七

菜蔬

山部ふかき谷くの野菜
花蔬のきゞひとちくを

○蕪菁い食を消し氣を
ひゞ嗽とやむつ○ふとて人い
中を通じくをとをやう
かゝ〳〵む
○菜菔い氣を食を消
し痰咳を治し中をわく
め大小便を利を
○芹い頭中の風熱をとり
酒後の熱をさめ大小
腸を利し血脈を益
○葱い汗を發し風を去

ふぐとけし魚肉の毒
をとろし中、ゆわくめを
かちゆくむ
○韮は胃熱をのぞき中を
わくめ虚をおぎなひ
のくをにうし
○蒜は脾胃ふ飯し中を
わくめをうくらん膳中やを
のくぐるゆ治を
○薤は水氣をとる中をあ
たゝめ不足をおぎなひ久
きくぐり腰にうし氣ゆ
くをと
○菠薐は酒毒を解し
胸をひらき気をくし

○胡葱は中をあたゝめ
をとろし食ゆ消し虫
をとろし
○芋は腸胃をゆたし肌を
みち熱をさう渇をやめ胃
をひらき宿血を中ら
○薯蕷は虚をおぎなひ
氣力を強し強をつくし
腰のいたをとゝの腎をます
○牛房は中風をのぞき脚
氣風をせんきふし面目
ををいたむにもよし
○胡蔔は氣ゆくだし中を
ちぎかひ腸胃を利ス久
膝をやをんをこゆくし
に益ありて損ゆし

○苣は胸膈をひらき筋骨をうるほし貝殼のごとくふくれ乳汁をつよくしるところ

○芥は腎經の邪氣をのぞきとゝのへて治し胃經ひらき膈を利し九竅を利す

○薺は肝を利し中をやわらげ胃經をすこやかを利す

○若蓮はをちかをとゞめ胸のさゝうを除き熱を解す

○天蓼は中風口ゆがみけんべを治す

○苣は養ていをくわし目を歡ぶこと和劑局方に用ゆ

○蘘荷は蠱毒おこり沙虫蛇毒を解す多くくへば脚に利あり

○莧は氣をもぐし熱を除のぞき九竅をつうじ大小腸を利し癥を治す

○獨活は痛風を治し中風濕冷逆気皮膚ひめり足ひさつる症を治す

○甎は腹を消し虫をころし痔下血を治し血崩赤白の帯下を治す

○瓠の口中のくるしむを治し水乃瓜利し小便熱とうを心肺とうをを
○瓜のもとをふ便とつうし渇とうを熱とのぞく大腸とゆうくを羊角瓜
○冬瓜のふ便を利し渇とやめ氣とゆしひのつく
とのぞく熱とうを
○蕈の氣分ゆし風を治し血とやぐる地ふ生ぐるを菌といふ本に生ぐると蕈といふ
○胡瓜の熱とをぞこをし渇瓜解し乃乃を利を

○絲瓜の皮とりてをミをうを腫のわ乃瓜しふ
し熱とのぞく腸を利を
○山葵のひへ性のつをを治し食をすくひを
を利し疼をひく
○茄の血をとんじつをを腫を消し腸をゆる
くし疼をの銀茄をろ
かををびあり
○雞腸の毒腫を治し点
をくいぐるをふし
人ふ益あり
○蒜の宿血をやぐる胃を

えぐ〳〵と食とぐ〳〵吐血
血とるあ熱とちりぞく
○藜い虫ところしひ
ろひとと治を脾胃虚
寒のんゆ用ぐ〳〵ど
○馬蒐いつんじやうと治
し血をさんしれを消
し腸を利をとゝこゆを
そゝんだゝど
○薑い胃とひゝた血とや
ぶると風邪ぐゝ菌の毒
を解し祚明ふ通ど
○藺陸い久さうどとゝ
し水氣ぐゝんどゝ
わゝたりのい人と害を

ゝぐ〳〵えぐ〳〵消し難
と治し労を治と疱瘡
せざるゝ小児よいひべし
○藜い蓼い羊ひぐ〳〵き悪
瘡痔愈ぐゝふ血とやぶ
乳汁とゝ〳〵ぐんの女ゝ
ゝべゝゝど
○蒲黄い乳癰水腫ふ汁
にゝゝゝべし食毒を消
し澤氣ぐんど
○蕺い熟とゝる水ゝゝ
利し久ぐゝの不足とゝさ
ゝゝふゝゝ
○狗脊いぜんまいゝゝ俗よ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ痢氣ぐ

治し帯下とにし

○蓴（腸胃をあたゝ氣欝ぐ）呕ぐやわ焦と安ぐ

○瓣（うるの色こゝろ素に用く脹壹呕逆を治す）

○瓣（うるのかゞこゝろ瓣）

犀同 搗柚の肉とも瓣と云

○芝（混ぐやゆ人の新久とき一神ふつし智とは氣とをこゝろは）

○鹿角（風氣とぐ一小児の骨蒸労熱を治し麺の熱を解す）

○石花（上焦の浮熱を去下部の虚寒をこゝろを接陰これいこしふ）

○海帯（風紙さる水をぐ一女のやきひを治しさんのこゝろめゆ）

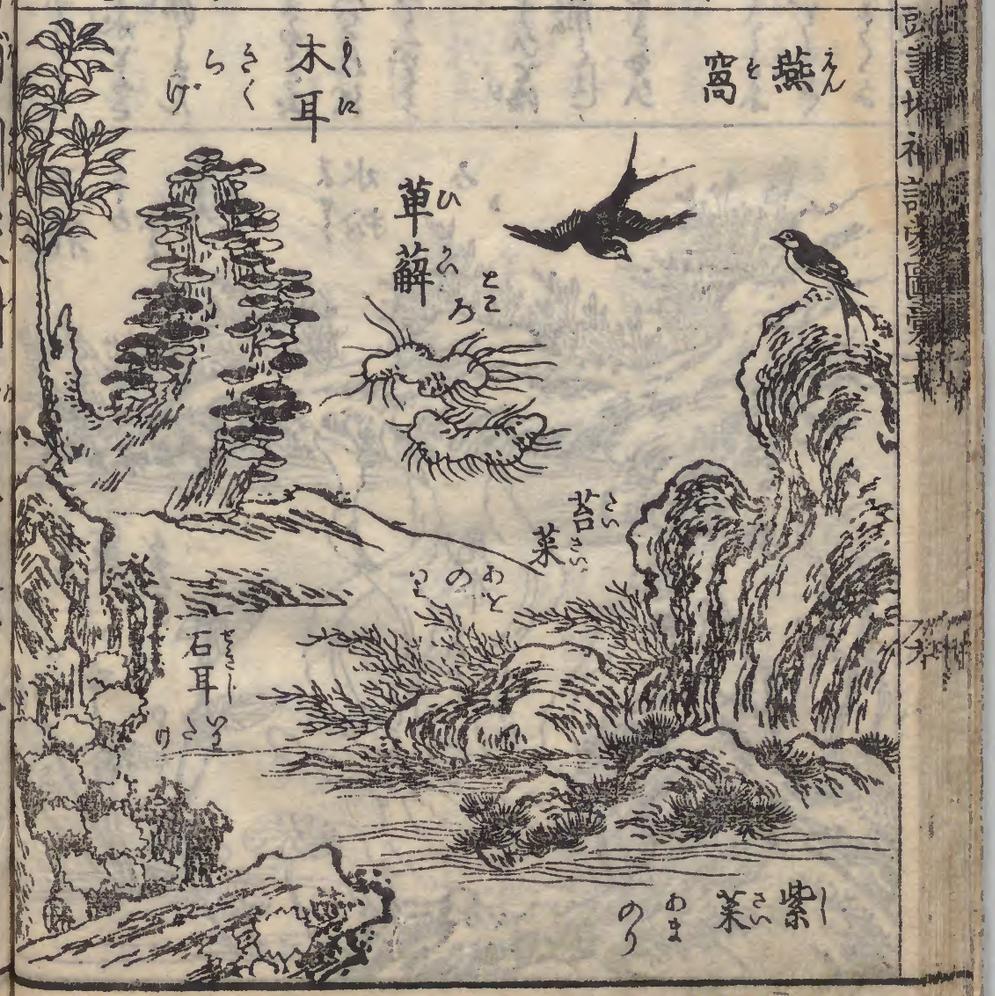
○紫菜（頻熱をこゝろぐ脚氣どゝ血をこゝろ人いこれ紙こゝろへべ一多くこゝへべこゝいこむゆう）

○水松（水腫のやきひを治し一さんのこゝろふ用く）

○燕窩（虚弱ぐゆ人労瘵とやむ）

○石耳（同分わこゝふ一精とゆう一人とこゝく多ぐ大小ぐんこゝく）

うしたむ
○苔菜は乾苔ともいふ小しところ一痔を治くらんをづを治す
○木耳は氣とまし一名とやうし
こうろぎとつよく一痔を治す
○革蘚はところあり黄蘚とも云ふ又野老とも云ふ味にがしく疝氣のむしをとる



頭書増補訓蒙圖彙巻之十八

果蓏

山部ふくてぐさの
たぐひとも

○杏は乾さしたるを
用ふ冷熱の毒とする
仁は性とくとし
○梅は酸なるを用ふ齒を損
ず仁は用ふ
梅は痰とのぞく
○桃は生は新久とも仁は瘀
血をくだす大便をつうず
○李は旁熱をさる肝病を
食をすゝめ変をのぞく
実は麦李とも

○梨は熱嗽とやむ渇とを除き消し火炎を肺とうるおす

○柰は中焦をうるおす

○栗は腎の不足の氣を補ひ脾を和し氣をとゝのゑ活を

○棗は脾胃をやしなひ津液をとゝのへ心腹の邪氣をさる心肺をうるおす

○栗は氣をとゝのへ腸胃を和ら〻腰脚をいたゝき活を茅栗 杭子

○柚は食を消し酒毒を解し腸胃の悪氣をさり婦人孕て食をもりいたゞき口渇を利し熱小渇をやめ小便を利

○枳は大便をとゝのへ痔をのゝくとをさる痢を除き消を脾胃よりさりのゝ邪気をのゝく

○橘は消渇をやめ胃の口をひらき膈中のふさがりをとのゝく

○榧は寸白虫を治し食を消し貝の毒を解く 欵嗽白濁をやめ痔を治す

○柿は乾を利し酒毒を解胃中の熱をさる

○椎は腸胃をあたゝめ人をて肥をやしなひ

○榛は氣力をほ腸胃を実

一人とをそをやうゝ胃を
ひゝく
○梨榴は喉のゝくを治し三尸
虫を制し味ひ酸甘の二品有
○來禽は氣をとゝ〻ゝ疾を消
し霍乱腹の痛清瀉を治し
○葡萄は麻病をひきを治し
腸間の水をのぞき久しく
久しく身をゝろくを
○金柑は氣を下胸をとゝ〻ゝ
久し渇をやゝ三日醉を治し
○銀杏はせいくい酒を解し
疾をとゝ虫をころを熟し
久しく小便をちゞむ
○枇杷は吐逆をゝ上焦の熱

枳椇は腸を利し大小
便を利し酒毒を解し
○楊梅は氣を下し腸胃をと
ぎ渇をやめ疾をころをづき
ゝを食を消し
○茄は氣を下身を利し處を
補ひ男は法を女は子をやめ
○佛手柑は氣をゝ〻ゝ疾
水をのぞき酒を養てのゝい
疾咳嗽を治し
○胡桃は肌をうるを髮を黑
し多食は小便を利し
○橼檸は中をあたゝめ氣を下
し食を消し胸の間の酸水

国立公文書館
National Archives of Japan

とのぐ元水腫を治し酒氣を散ず

○木瓜は脚氣筋ひきつるを

ゑらんを治す

○茗荷は中を安ず膽を補ひ酒毒を解し渇を止やめ丹石乃ぐすりを解す

○茶は小便を利し痰熱を

さまし渇をやめ極ひるをくかく食を消し目をめぐらしを

○椒は風邪の氣を除き中をあたゝめ女人の經水を通ず

○胡頽は病を治し寒熱の病に用ひ

○勒膏は風毒を消し耳目を

○慈姑は産後ふしゐを去り死せんと難産をすくひ治す

○栫東は心を志づめ熱をさまし消渇をとゝめ久しく服すれば

耐久をよゝ

○松子は諸風腎を潤し痛頭

をやめ

○龍眼は胃をひらき脾を

虚を補ひ智を

服すれば志をつよくし

て老ず

○耳蕨はさたくの木の

ゝく脾胃をあたゝめ

○胡椒は中をあたゝめ痰を去

腹痛をやめ胃を虚冷を治す

○粧瓜は大とを咳を治
痰をそぎのぐ利を
土瓜 赤雹子同
○燕覆は膀胱を治し癰を
消し腫をさん紙乳汁を通ス
○甜瓜は熱をのぞく小便
を利し煩渴を止む暑
月にくへば暑にわるくを
○苦瓜は邪熱をのぞき労
を除くぞ多ひ心瓜をくく
し同瓜わるくをふを
錦茄枝 癲葡萄
○烏柿はわるくをし
火柿同 酥柿はさつがき
烘柿つくる白柿はうを
甘葉

○蔕は瓜の蔕柿の蔕
かるとは蔕につる壹同
柿茄子どの蔕なり
○菜は糖糠などの実を
りる彭ふかさ云
○仁はくるりの核のうち
ふわるるのをり
梅仁 桃仁 杏仁なを
蔕わるるの
○核は梅桃そのかをで
くるりのは瓜茄のさ〻え
核の中菜にるるるの
わるるをるる
○紫糖はかりく食べん
痛し長虫を生を

○沙糖は心肺をとる

大小腸の熱をさる

酒毒を解す

○氷糖は心腹の熱を

去る

日ぬ

氷糖

沙糖

紫糖

核

仁

菜

○松は久しく服をまぶ身ぬ軽くして老をとゞのぐ

とゝ又つを五葉と俗に唐松と云

○楓は久でかりゝ

鶏冠木とも書也

りゝぐの幸ゆり

紅葉は猪木ゆ多

のり楓は中にも勝

頭書増補訓蒙圖彙卷之十九

樹竹

此部にはゝ本竹のゝ分をを

松

楓

○檜は深山のうち補て大木となる白木の木目曲わなくみるひ木と乳ひて乳上ととゝ揖ふつるうり

○圓柏は素柏ゆて変の松と似うち共つゝ但葉檜よりもしく色黒く皮ゆゝ

撼柏同

○檉は檉柳なり

一名雨師とゝ

檜 ひのき

圓柏 いぶき

檉 ひろ

○杉補深山のうち

ぞろりの大木と

かるる木立直ふて枝葉ちげる色

葉ゝ毒瘡を

洗ひ水ゝ漬ゝて脚氣腫を

治す

○仙柏は槙のゝに似うち変の形

ゝ成合せるるゝ

一名羅漢松

仙柏 いぬまき

杉 すぎ

○南燭は五月ごろ
かきの花に似たる
実の白き和漢ふ
紅ふなるその色
英あり山本英
き義とこれる時
は本紙こんぎその
義こ白ものとなる
ゆへ多くよれ面
のひろへに植とく
なり
○山茶は品類多
し俗ふさんこ
といふ花咲こと
紅白花あり
花葉花

○櫻は一名朱桃又は
李英ともいひ
梅ふひろうて花を称
ふ花今は花ふ櫻
に紅色実を桜桃と
いふ櫻は一年多くの花
しふ後ふ金櫻の種
類多くあり今は
百種ふ及ぶ
○海棠は花白く
紅色の面あり
花実多り
しのこと三月ふ
花さく一名海紅
花とも

○躑躅は類多し
紫花は二月より花
さく赤つゝじは三月
花さくきんげつゝじ
は一重く花大
きく三月末の事
紫の花濃色みと
薄みつゝじは
花びふ四月花さく
つゝきりしの白花
と紫あり花大
てきて一杜鵑花を
又月花さく紅花
又白紅斑入紫紅
斑入等種々

長一花白くて
赤一赤あり花
と本草花とつゝ
去花さく
○本蘭は香蘭に
似て花は蓮のごと
くうち白くかゝる
ひらくる花と
本蓮花とつゝ
○厚朴は去冬成
す一四季たゝま
を花をさいて実
あり一名榛

補 ○槿い芙蓉のえだに似くふう
為紅白わり八重
ひとへわり七月花
さく一名日及

○芙蓉い水よせ
をうく紙ゑ芙蓉
とう荷花ゑり木
を木芙蓉といふ

補 きぐらをともいふ

槿 むくげ

芙蓉 きぐらを

一名拒霜

○蜀漆い秋紫の
花ごく花中に出
き実ゑ根と常
山とゆ六月に紅
ると食をまぐと
毒わりしもの
○女貞い冬ごもの
てもがすどうて女
の貞節を見して名
づく一名蠟樹
○冬青い冬月青
くみどりわりつて
冬もこの葉わ
しまる

蜀漆 くさぎ

冬青 のさ

女貞 ねつ

国立公文書館
National Archives of Japan

○粉團の葉すがた花白くまるく越ちごとし四月花さく玉繡花も繡越花ともいひ木の大なるもあり粉團に似たり

○紫陽は又八月花さく粉團似たり花いろ白のち紅色になる

○薛荔一名木饅頭とも又鬼饅頭とも秋のころ実まろく実の中わり

○梔は花白く八月ころ実熟す実なる際を用ひる上焦の熱をとり疼を治す花は蕊蔔とす

粉團

紫陽

薛荔

梔

○錦帯花四月ニ花ヲ開く楊櫨ニハ花ヲ開かず大ハ花開ク初ハ白く後ハ赤くなる

○楊櫨ハ葉ニ毛ヲ生ずるハ花もふくれ葉ニ毛ヲ生ずるハ実ハ莢ニなる

空疏同補

○棘ハ八月白き花ヲ開く

棘刺棘鍼並同

○角椒ハ五六月ニ実ハ莢ニなる

のごとく細ク長くして角ヲ成す

○木穂ハ五六月ニ白き花ヲ開く実ハ熟すれバ莢なる

○櫚樹は六七月より
花白花さき花は九
月に実を結むなり
かくの如く実のなれ
補 此本の毛茸
を帚につくる
○黄楊は葉を
かくのごとく花さき
実をなるは四季
補 ちゞ油を木も細
○衛矛は秋成

櫚樹

黄楊 つげ

葉は紙はりとなる
三四尺なるは秋の
補 を入れるなり葉は
葉のはのかさね
あり今はふるきで
一名鬼笠
○鐵蕉は蘓鉄
かと一名鳳尾焦
とかつく琉球より
なると番焦と云

衛矛

鐵蕉

○楠木の葉と塩
熟すといふ出あり
て房とひきぐと
入倍さといふ色
ふしあり
○楮の皮と製
て紙ふたをかう
かうとといふ穀
構なしびふ用
七月七日児童
此葉に詩を紙
書二早ふとなり
○楮の葉ぬる
ふ仰ぐると秋こま
かき矣とひすよ
ひ木ると葱ねと
ゆるうるーとる
みるうにるーいま
りこあり
○木槿に名岩
桂花といふ花白
と張桂といひ黄
かる紙金桂といふ
番つくき花あり

○桐の葉につる
四月花さく白く
高さ十ひろ大木
なり箱をつくる
に代なし八月
○梧桐の皮まろく
ふしなし実を
胡椒のごとくな
にちをあると花を
ふりて実なり
同
○楸の葉ふり

にかくうつし
又栗ふまりを実
と擬実とも俗
ふどんろとも也
本ろく葉とし
て実上なり
○楸い一名樸樹
とも実と樸樹
列とも俗ふ
とも品類ふし
木ろくたて性
にたるなり

○檗ハ葉呉茱萸ふかくうるをちがひ
ど皮そこ白くうら
茨多ク黄檗と
いふきぶなると
○紫荊ハ葉こ花
ひらいて花むらさ
きなり葉花ひら
ク秋実のる実と
紫珠と云
○石南ハ石の多場
に白花ほそ
ふく石菊と云
○狗骨ハ木のくぶ
へ白くて狗の骨
乃ゆゑ名狗こ
つゝいふ枝本も
書なり
○瑞香ハ葉厚く
茎花さくのち下
香のごとく久茂白
ゆゑなり
○接骨ハ小便と
通じ水腫と治ス
一名木蒴藋也
ゆゑ昊の痛こう
茎ゆゑ

○茱萸は一切の風氣を治し中を補ひ氣を益ぶ腰を消し胃を開き食をすゝめ

補棟の葉梶のごとく三四月に花をさく為生長すれば俗に

せんぶんと云茱萸

金棟まつ

○五加は荒まつく

つそうつくは皮膚の風濕をさる五

梔枇杷

節の風邪さる熱毒をさるこの脾

をさるべし

○紫薇は花紅色

なり七月さく百日

紅俗にさるすべり

なり

○樟は楠に似

四季あり冬

細き花さく楠木

に類して大木

なる故年を経て

其木石のごとし

○石楠の葉魂は細
くして樽木吾樫並
同皮を煎皮とす
○合歓は五月う
花さき又紅白の
実ふさやの葉
昼ひらきて夜ねむ
むとて一名夜合
樹とす
○楡に赤白二種を
三月小英を生ず
こち殘のみし者
一実を楡莢楡殘

○葉は木のえだより
頻葉をとる紅葉も
みどりの落葉もちる
病葉をとる
○株はるぜより始
みどりをかるを去に
入て根をひいて出
る株とす
○蘖は木のこうを
へ生事多り枠丕
多くひ同
○芽は草のめざし
いつくはいく萌芽を
もいつくさをとる

○楊は黄白青赤の四種あり白楊は葉まるく青楊は葉ながし赤楊は葉ながし赤楊は葉ながしく赤くそひあり楊は川やなぎなり

○寄生は諸木よりあり枝のみ木はまふはまる本ばかり本よりて名ありまた寓木ともいふ

○柳は種類多し柳は白し柳は紫柳は糸柳の中なり

○槐は葉かそく云は黄ふりて名とし

ひらふは用ひ又槐さやと槐角といふ

○椋椋同一名郎來といふ葉はかりて物ばかりをいふ

○栴檀は葉槐のごとく皮青し黄檀

白檀紫檀赤檀
黒檀のこゝらあるを
神
伽羅沈香いとの木
枯てあるなり
○皂莢の葉槐
似ても枝ふとく色
美かなく黄なる
花咲皂角ゝた書
○柴の小木散財
なるを俗ふとを
○薪の粗を薪と云

○竹の六十一種あり
六十年ゆ一度
花さき実のり枯る
神
花をだ綿に入て
いと花似くるぬぐり
とゝの指を長れ又
すと
○筍の芽同
食をとの膈を利
痰を消し胃を
やゝよし水道を通

一名とする

○篠は小竹なり竹の根より生ずる小さきをいふなり

○箬は山ふせぎなり葉は広くして長さ一尺ばかり五七葉にて粽をつむ弱同

○篁は竹の苗なり

たかむらともいふ

○蘆竹は葉大なり

○樓竹は名葉竹葉樓桐ふ似るを杖に作る故杖竹ともいふ

○根竹は根を用ふ

かるの類の竹なり天親竹ともいふ相思竹ともいふ

○紫竹は親竹なり

○舞のきさは城里女英のなみだなりとて

竹

たけ

淡竹

苦竹

篠

ささ

筍

たけのこ

箬

ささ

篁

たかむら

蘆竹

ろたけ

たのびざけ

そうとゝ
○無節竹 きちく
のちくいりちゆか
竹 ちく
○篁 ささめだけ
ゝ竹の実りの二名
竹 耕 ぶ 俗ふの人
去稈ん去て竹の稈
うゝと実の中に茶
のごとくたわり
○籜 たけの竹のかわ

櫻竹 さくらちく

扶竹 ふちく

紫竹 しちくだけ

○筒 たけのほく
簡同竹節こけ
のふしあり
○篾 べつたけのわを
かゝ俗ふてようべつ
簀 すのこ 同
○幹 かんき 木の心あり
俗ふてみきあり
○根 こん 木の根あり
根同本 こん
○枝 し 木のもゝあり

篁 ささめだけ

筒 たけのつゝ

篾 べつ たけのもとゝ たけのべつ

無節竹 きちくだけ

柯同ひとたちこと
條こしてえだえん樹の
はこと極とす
○梢こすえ木のこずえ
杪同
○炭すみ
烏銀こくもつ人格炭
ハけーどる
○柿こけら梢柿
きのこ〜鋸末
おがくずなり

頭書増補訓蒙圖彙巻之二十

花草

此部にいを形〜の草花をしるす

○牡丹ハゆうみぐさともいふ花乃王ともいふ花多し紅白あり紅を上品とす花の冨貴なるものなり古人も賞ぜり一名花王又木芍薬ともいふ牡丹皮とて薬に用ひ

○芍藥い三枝五
葉あり花牡丹と
似くをこゝ中さ
し裏の神の花
さく紅白紫あり
花相時離とい之
根と葉ふ月白
○搖草い蕪
菁の如くふてと
い〜花ぶ白あり

芍藥
ぢやくやく

搖草
ようさう

葉大ふて花ろ
紅又ぶあり又月
花さく実いたさ
物のごゝ中ゝ
さくして扁あり
○蜀葵いこあひ
ひあり花ろあふ
ちく濃紅別して
うゝ菁葵同又
戎葵ともいへ
○錦葵いこあひ
かりて殘葵ともも
荆葵同

錦葵
きんき

葵
あふひ

蜀葵
しよくき

○芙蓉の葉葵のごとく花紅白五一重又重わりめを糸い本槿似く大ゆり清く美ゆり

七月花さく

○龍膽の花桔梗の花のごとくの花ひらのごとく葉い笹のごとく九月のころ花さく

芙蓉

龍膽

○秋葵葵ところ側金盃葉ところ花さく俗よろこ花さく俗よろこ

○芙蓉の穂に似く実多し一名狗尾草と禾粟の中に生ずと俗よろこ草ところ

○金錢花の午時花ともに秋花さくこれ花そこ一名子午花

秋葵

芙蓉

金錢花

○蘭は草むら
こと葉みどり
なり水沢のほと
りふかきを花黄
白あり一てうじ
葉は品類多
○風蘭は一名を
桂蘭とも吊蘭
とも云ふ数り
岩蘭岩石蘭

○秋海棠は秋
に似くかし長
く草赤し花も
赤黄又は黄うす
六七月花さく花弁
淡きもあり絡ひ
花とも書なり
○秋海棠は秋
花さくを幻色
草葉とうふ色
あるもあり

○剪秋羅の花
石竹のごとく朱
色にして美なり
六月花咲ス
異名ハ山歌也
○剪春羅の花
の色せんとうなり
淡く黄なり
○薏苡ハ子白と
黒色薏苡子と

○百合の品類多
此花三月末ヨリ咲
紅色と白あり
○巻丹ハ六七月ニ
花さくなりして黄
赤ニ又白ハ点もち
のびし花多くさく
葉のうらにろさ実
とりと一名番山丹
○山丹ハ四月初ル
花さくかくして赤
白色赤ハ点無也
ちいさし 渥丹同
此外数多くあり

○他偷は四月の末より花さく其品多し花黄色あり出る花さふ稍くろくろ又秋さく花もあり

○麗春は三月に花さく一きはなはだ大きい紅色なり名仙女薔薇

○金盞花は紅色のかぐつち盞の如し色赤し三月花さく今俗にて金盞花と云金盞花は別種なり

○春菊は花白くあかい黄色なり三月花さく蒿菜花とも云の時食を

○蒲公英の花白きさかり黄なるいふなり二三月より花さく葉ばかりて食べ

○菫菜は一名菜頭草と云ふ

とりどりさかり花黒白花又ふと紫乃りの葉丸くふせ

○虎杖は月水ばかり通利し瘀血を破る渇ばかりふ便を利腰ばかりを治す

○萱草水腫巻丹のごとく黄赤く砂麦より味春の葉ばかりて食べ水氣乳より痛を治す食ばかりを消をこのんでくりが脱てこをひかし花みを

のりのい毒あるものゆりて食べべし

○酢將水は一名酸草といふ俗に云とりのごと

○射干いひわうぎ
ともいふ葉のうちに
擔扇ふ似うち花い
黄赤しく六月花
さく烏扇烏羣
なしびふ同
○蝴蝶花い射干
の類ぞう三月白き
花咲葉と中にわう
俗ふやぶちんとい
ふやぶい射干の音
を誤しものうと
○夏枯草い野う
多し蝴蝶花咲

干ひうぎ花い
ひうぎうぎ花
を紫羅傘と
いふ四月花さく
○馬蘭い沢瀉
ふせどと氣色
花いあやめにふく
細しく色もうに
馬揀しもの葉
のわうと花さく

○牡若は水中にまたを花大ふして色桔梗の花なるにくくうつ〜葉のようしのふ花さく

○菖蒲は花牡若よりはくふかく葉も細しく菖蒲と云い別種也花をしく花菖

○様錦は花葉黄緑色なるなると十様錦とゆふ又唐赤紅紅かゝる紅唐赤紅とゆふ俗よ葉絡改とゆふなり

○桔梗は花紫色白わり一重五ひさ秋五六月ふひく又梗草とゆふ

牡若

菖蒲

様錦

桔梗

○烏頭ハ花きく
やうの花の色ゑり
かくら烏の頭に如
し赤ろとうぶと
ろくちに似くり
九月花さく

○鳳仙花ハ花紅
白わとと七月ゟ
さくゑ金鳳花と
いハ花ハ黄ばミ葉

○番椒ハやんま
を治し虫とと
ろと人よどくゑ

○丈菊ハ一名ハ延
陽花とハ日輪
ふむりハ花多りよ
つく日車とも云
花菊ハ似くゑ也
色黄又白さも
あるゑ

○杜蘅ハ葵ハ馬
蹄に似くり紫
の花咲馬蹄香
土細辛とハ

○薔薇い花紅白黄葉紅あり千重のものは牡丹いばらとひとしくあるを森薔薇と云一名月紅又長春とも云

○慎火一名景天又戒火とも云小かは佛甲草と云

○苔蘚同水にあると陽整黒と云石苔石濡花とも云

○酸漿は五月に白き花咲実赤くそうろうれどしよろく金燈籠と云

○旋覆い黄花咲

菊は中ごろ六月に花さく九月まで

らうたの花さくと

紫苑という是を

ひ年花咲

○藤は三月の末
ふ花さく花紫い
おそく花の長三
四尺より及ぶ白花い
早くさく花て紅一
一名招豆藤
○石斛は石上ふ
生ゑ胃の氣を
平にし皮膚
の邪熱をさる一

○棣棠は花黄
て一重有八重ア
三月花さくあひ
は地棠花と名づく
○卷栢は一名を地
栢と云石間に生ス
生ふく用ゆべ血
と破血をい血を止
○玉栢は一名万年
松とも云ふを石
松又玉遂ともいへ

○葦い水色よ
生どのまこと秀ざ
る紙芦とのひ長
成とると葦と云
葉い竹ふ洲く花
い荻のごと
○蓮い花紅白色
葉と荷とのひ根
と藕とのひ花を
茎蓮とのひ実と

○菖蒲す九節
なるりの仏菖
蒲と名付冬至
の後五十七日み
てもこらてせまと
○菰い水色にせ
ど菖ゆくうり名
茭草又蔣草ト云
○蒲い水色にせ
を絶ゆ織べ蒲
穂ゲまかこ花上の
黄粉と蒲黄と云
○萍い水上よゆう
て根ゆ血色れ如

くなるとき蓴菜ト云
○薛い水辺に生ず
香附子の苗に似たり
一名莎白薹
○蘭い沢地に生ず
葉矢に細く長し
麻布に芯ト用ル
○芡中に補ひ
すと多く食い風
言伝ふ芡実と
を芡実ト云
○薏い九月十月に
る緑色に紅と染
一名黄草某行王芻
○菖い水底に生ず
葉い叡のごとし上昔

○芍い葉に毛
あり葉に毒あり
実も大きなり
○蘇いろ〻方ヲ
て葉ヲ用ル蕃ニ
紫あり桂薩同
実も葉も薬接
ふりる
○蓼ハいろくあり
やわ水氣面に生ず
ると活見ゆ
○萹蓄ハ三月に
ちいさく花ヲ
生ず和名ハ
き扁竹同

○菊の百種あり
花も数品あり
痛目紙巻
辛とのぐ
ひろう葉小さい芯色
ある菊よ種あり
○苣の葉ゆさう
皮い縄又い履ふつ
くるあり大と石芒
小と芒芒
○荏の白穂
又山野ふ多く
はと油あり

実あり花いひと
き白いむ
あるを
て紅紫花へ花形
も品あり
○鼓子の花の
ち軍中に吹鼓子
のごと故ふ鼓子
花ともいへ
○葫蘆の枝
五葉花白く実
青へ緑豆の
痛所ふ
煎じ
一名接骨草

○水仙花いとの
神〻う花ひらく
神〻ま〻すぐ花を
くゝり酒盃の如く
黄なる物を花びら
らの白しろく金
盃根葱しい人
新かい石蒜ゆくう
○麦門冬ハ四月
ふくとむくゝたの
花ひらく実緑よ
りく珠のごく丸
一秋のこゝろの山
根に葉ハ翠の

水仙花

麦門冬

○瞿麦ハ
花ハふ六月ふく
ゆのふに多しを
ひい彩花わりこ
もふくわり
○石竹ハ接子ふく
仰く花ハ白ハ候
なゝ接わり八六
月ふ花ゝ一至ふ
まわり
○玉簪ハ葉大なを
秋花ゝ久ゝを
数ふわりてゝもい
ゝ一名白鶴仙

瞿麦

石竹

玉簪

国立公文書館
National Archives of Japan

○蒼朮は花うと赤し脾とそこなう湿気を除く中をゆくと山薊と同じ花ゆえ白朮

○木賊は目のうとを退積塊を消を和名とくさ板とを磨て用る

○山葱は一名を漏葱ともいう鹿耳葱ともいう俗ふいとうとくさ

蒼朮 かけら

木賊 とくさ

山葱 やまねぎ

草とは水湿の地にはを五月花咲

○馬勃は湿地にて木のうえにとふ生

○石韋は湿地にはを葉大ゆえ

○螺靡は一名鏡面草とは石上にはを豆ごり

馬勃 ほこり

石荷 ゆりのそう

石韋 ひのそう

螺靡 まめばる

○芭蕉は葉葉ど一葉のごろ附は一葉焦よりくこと也仏芭蕉とも

○苧皮てんそを布と織さし布はこと多り紵同ろくしこもの

○艾は去苗とは秋ふき花さく艾高多りて蓬若とも

○蘚は腰背ろこころろくる仏沾腎とをきるの蘚とろくくし精仏

○華蔓草は

このごろけんの

ひるろふくひろ

蔓紅色多り三月

花さく

○鼠麹は小く黄色

る花さく鼠の耳

の毛とくる実と

生とる鼠耳草と

もいく

○羊蹄は一名禿

菜ともく牛舌菜

ともいく実と食蕎

麥とも

国立公文書館
National Archives of Japan

○陵苕の木にまさく人妻ちを秋とと花咲るとき赤しゝ陵霄花といふ

○藍の葉蓼ふ似く大ありあさでの如く葉の中に黑きさくあるを入れ用ひ紅の花さく葉ふ紅染色にしる

○茜の根草にて染る草なり一名地血といふ

○山薑草にて染る

似て花わ〜ふい草豆蔻ふてはい杜若ゆくり名

羨草

○澤漆の葉馬齒莧ふ似さり茎ふてみどりまさき花さく毒草なり

○苞麻の葉蓼の葉のごとく中空ちんこ入まこと秋花さ花実ふ似ぶ実ふ刺わり

○蒼耳は葉茹るのごとし風湿つぼく氣ふさぎ目と鼻ふしぶしたびたび流る

○車前は葉ひろく花と出を七八月の比実をとる茅茨牛舌同

○龍芮は四五月ふ葉なり花ちいさく実とひちぶたさ豆のごとし一名地椹

○防風は四月ふ葉と生ず八月に実ある花さき六月ふろさ実と

つを癈血のつくことをとめ大ぶんを座ぜ花とそうて紅ことを

○積雪は年名つぶくさいふ葉まるくたて狀のごとくつるなり連錢草胡薄荷並同

○苦参は茎ふ椹ふたり花黄色にして実はさやあり根長くにがし水椹地椹同

○蛇牀は気とたど中とめくこめ癈をおい風ふさる油牀蛇栗同

○鼠茅は実は天蓼の実れごとく毒あり

○葛は粉は渇を止ゑづきをとゝめ胃をひらき酒ごとを解し大小便を利し熱をさる

○紫草は九竅をつうじ水を利し毒を消をやうさうれうし一名茈草戻しと人

○鴨跖は野外にをゝ死あをゝ碧蟬花 笛竹花

し多孔やぶりこゝ虎掌鬼蒟蒻とゝ

○防已は風湿脚氣の痛を治し癩れ痛を治を解離せゑ

○牛膝温ふてきびき女腰脚ゝくむを治ス山莧菜對節菜ごゑづく

○水莨はきうにはゑをとすに付きはつゝあり大毒あり

○絡石は茎攀の如く花白く実ゝ色石とまゝ

○茴香は疝氣を
のぞき腰もとのい
きをよくし胃を
わるくむ蘆香同
○蒿蓉は花莢
白なり一さくの毒
虫のさしこるふし
葉ともに汁を
付くべし
○天茄は一名龍葵
この人参ふかよそ
小なり夏月のもえ
わかき白花とり
きわかきもえ実の

茴香

蒿蓉

天茄

同邪氣を拂ふ
○荒蔚は益母草
とのふ湿地にすぐ
○茵蔯は葉のう
ち白くまくるあり九
月ふかを花莢か
る花さく
○玄及は実と五
味子とのふ枝と初
あにつけ蚕は孤
をもつて他のうち
に製ふ
○地膚は若葉をく
らふ苗帚獨帚同
此本を帚とを

青蒿

荒蔚

玄及

茵蔯

地膚

須磨書槽浦川家圖譜上

○忍冬は木にまとう人葉あるくもろ
三四月花さく紅白
く後よ黄ゆりいる
金銀花という人
○茅は水を止血
て利ゆり小腸とつ
消渇鼻血下血血
淋をつ薬という人
○萍蓬は水沢ふ
ほとを煮ふ葱姉ふ
ふくう水栗骨
蓬同
○藻は水ほとを葉
大多いる藻煮の
ゆもたは水蘊という

○萩は野山
多くて草むし
て刈ゆり煮本く
大ふ一てるの蹄
のおく一秋ゆた
実の
○萩は郊野山生
どろ仏卵萩と云
煮さたとゆり花か
ゆ仏実仏卵という
花紅白色て大多ゆ

国立公文書館
National Archives of Japan

○建蘭 今又
白蘭なると一ツ
蕙花ともいふ
鉄脚蘭ともいふ
○金燈 石蒜
といふ又ひとゝなる
一名鬼燈檠又
蔓珠沙花とも
いふ秋の末赤き
花さく葉ハ矢ノ
○和州有此種

○莖 ハこゝ
幹 同莖の衣と
苞とハ一ツ物也
草根と葉とハ
さの○ノ
○薹 ハ子ハ高な
どのたゝ一ツ葶
同
○葩 ハるびゝ
花片 花瓣 並同

○蔓いとるもの
本の本と花らふ
草のかゝ蔓と云
○苞ふつかとも
蓓蕾同
○蓋い花のもべ
なり蕊蘂ふ
らびふ同ゝ花心
ともゝ
○蔓いとるもの
なると花蔕花
附ゝびに同

頭書増補訓蒙圖彙巻之廿一

雜類

此部しゝ諸天神仏聖賢佛菩薩諸祖師
其外人物の部ふ漏るを補ひもとる

二王金剛
○右と左弼金剛と云
人の生善ゝ惡ゝ
ゝ邪羅延金剛
ともゝ
○左ゝ輔金剛と
ゝ人の断惡とゝ
あびゝ密迹金
剛ともゝ佛法の守
護神なゝ三門ゝ
安置を

○持國天王乾達婆
毗舍闍と号て踏後へ
て東方を守護ちくまふ四天王乃第一分り
○増長天王鳩槃茶
薜荔多を号て踏
後へ南方を守護ちくまふ四天王の第二分り
○廣目天王龍及び富
單那と号て西方を守護ちくまふ
○毘沙門天王夜叉羅
刹と号て北方を守護ちくまふ

持國天王

毘沙門天王

○韋駄天は佛法の守護神なり魔王佛舎利を奪ひ逃げ去る
○鍾馗は唐の明皇夢に大臣終南の進士鍾馗と云天下の虚耗妖孽を
と厭うんと足を踏へ故に
其道士に命じて其形を
畫せしめ天下に伝へ云

新韋駄天

新鍾馗

辨才天女

○衆生に智恵福をあつくさづけなり琵琶を彈じたまへり相とりつくろひ吉祥天女ともいふ

福禄壽

○福神なり天竺生とこゝに星乃化現なり頭かぐしてはれは經成結をへてもそう結を星とゝ麻成

大黒天

○八万四千の眷屬あり分員園と轉じて福者とかさんと折言たまへ摩伽羅神ともいふなり

蛭子

○伊弉諾尊の第三の御子日の神の御才西宮蛭子三郎殿とつくり市乃賣買と守つる御神なり

布袋

○支那の散聖にて弥勒菩薩の化身なりとのべり常に布の袋を負くわをべ是ゆへに布袋和尚と名ぢけり

壽老人

○福神の老人星とて聖れた現なる白髮ふしく慣ふ杖とり杖とり康と

○伏羲氏唐土の帝王大聖人なり此人生れ始めて網罟を作り漁獵を民に教へ又畫八卦琴瑟を造れり人

○神農氏同帝王にて聖人なり民に五穀を教へ市を立て交易の利を教へ人身の病を療ぜる事を教へ此人醫道をこれ

新伏羲

新神農

○倉頡は黄帝の代の人なり眼四つあり鳥の足跡を見て文字を作る是文字の祖なり

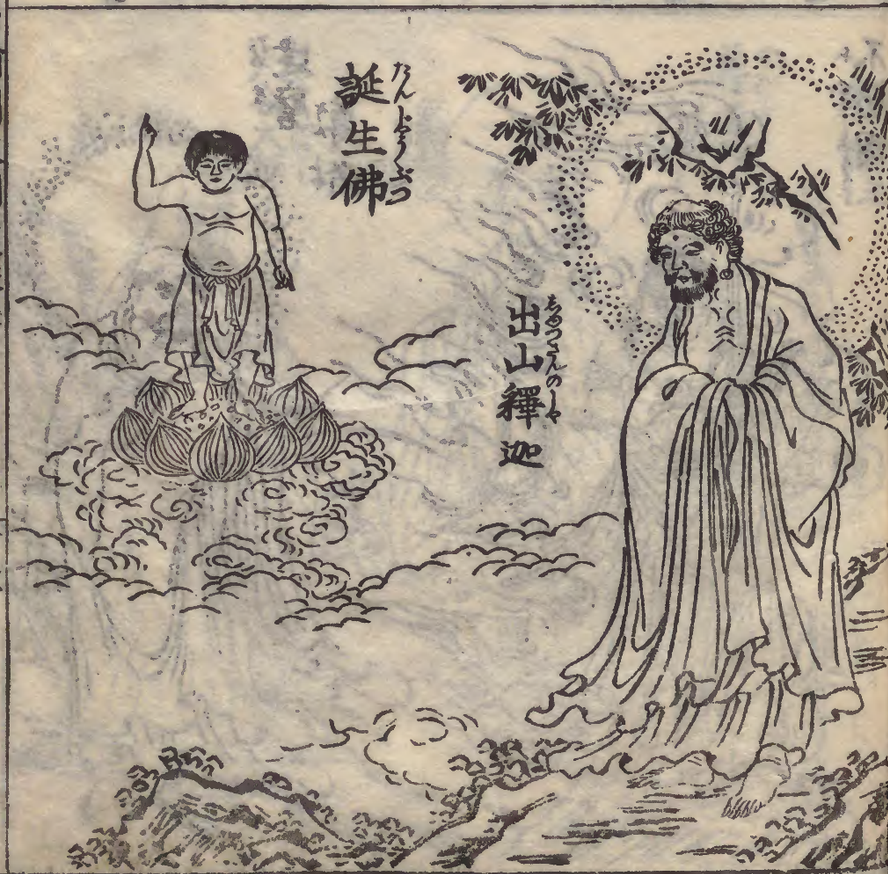
○黄帝は軒轅氏とて蚩尤と逆らひ亡し帝位に即く聖人也此時より曆算律呂宮室書契冠服等をとゞくく具る又造舟と作る女媧を命じ元妃と命ず

○孔子は魯の人仲尼と号す堯舜の道を弘め五常を教へ文宣王と号す儒家の大聖人なり

○老子は周の代柱室の史なり生まれながら白髮なり道徳五千言を作り無為自然の道を教へ道士の大祖神人なる真経を著らす

○許由は堯帝位を譲らんとのゝしるを聞て其耳汚まりとして潁川の滝にて耳を洗ひ賢人なり

○維摩居士ともいひて
ものに拂子を持方丈
の四ふ八方の師子座
とゆづり三ゐの大乗を
入と法門とし給つ
○上毓の弥陀は比叡山
横川乃峯に阿弥陀佛
のゐる家に現じ給ふを
恵心僧都ゆめみて
写しのひろまりや
○聖徳太子は廿二代
用明天皇の皇子なり
此代推古天皇元年丁
巳に日本佛法乃
祖なり守屋と戰ひ拂及
○出山の釋迦如来
十七歳にして出家し
三十歳の御時十二月八
日明星の出るを見聞
始大悟とあり正覚
を成給ふ
○誕生佛は釋迦如来
卯月八日寅の刻に誕
生し給ひ七歩あゆ
み給ひ右の手を
上へ左ゆびさして天
上天下唯我獨尊と
のたまひしとかや入滅は
二月十八日なり



○初祖達磨は梁の武帝に出て入江を渡り魏の少林寺に入る面壁九年終に達磨ともに葦の葉に乗り

○不動明王は右の手に利剣を持ち摂の縄を持ち八大の悪鬼を降伏し後の岸に動ぜず

○龍猛菩薩は南天竺に出世し釈尊より八百年後に出世し真言宗第一の祖なり大日経金剛頂経蘇悉地経を弘め

○善導大師は唐土長安の人なり出世して三十余年少も睡眠せず唐永徽二年三月十四日遷化

○天台大師は陳隋二代の国師唐土天台宗の開祖十一月廿四日六十歳にて入滅智者大師ともいふ

○六祖大師ハ唐土ノ達磨ノ第六祖諱ヲ恵能此下ノ禪宗五家ニ分ル大鑑禪師ハ
ソノ号ナリ
○傳教大師ハ寂證ノ人日本天台ノ開祖ナリ延暦廿一年ニ入唐五十六歳六月四日入滅
○役行者ハ役小角ノ人葛城山ニ入テ孔雀明王ノ法ヲ行ヒ後ハ母ノ鉢ニ入テ唐ニ

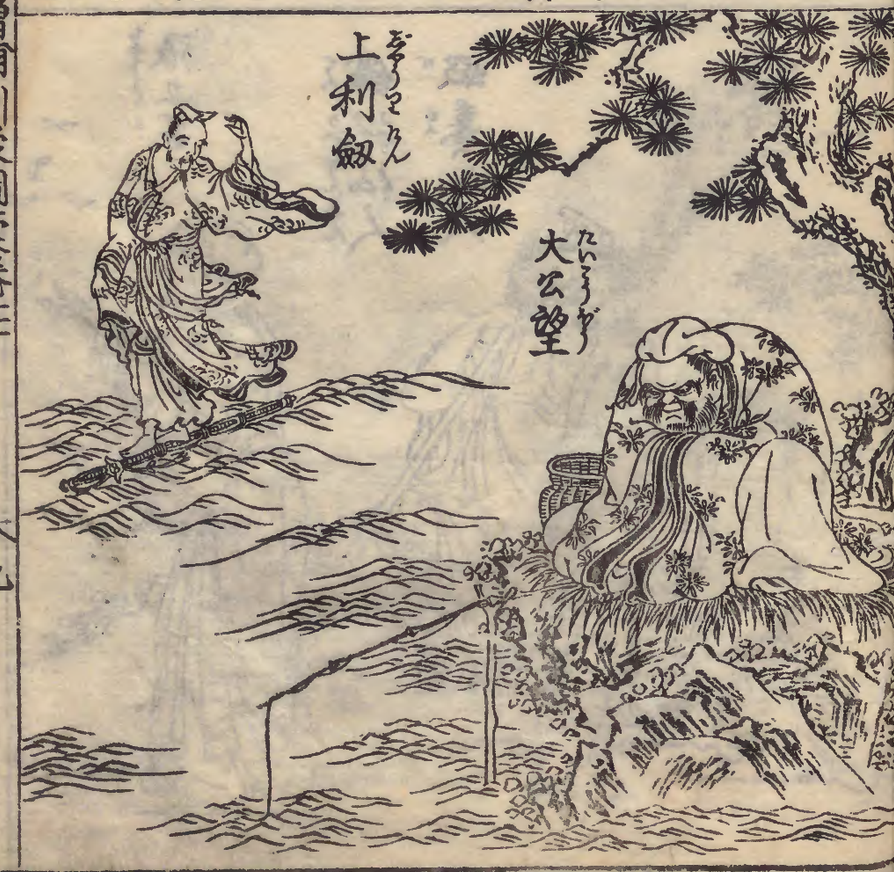
○寒山ハ和州ノ人天台ニ住ス常ニ拾得ト法友ナリ後ハ文殊ノ化身ナリトヲ
○拾得ハ豊干禪師ノ道ノ子ナリ拾ハ得サルヲ拾ヒトリ寒山ト共ニ絶ヲ
○巨霊人ハ大力神通ヲ得タル仙人ナリ
ヲ得タル仙人ナリ常ニ白虎ヲ

○費長房ハ後漢の代の人なると仙術とをかびゆく白鶴にのりて空中と飛行しあるゆへ人なり

○琴高ハ神仙の術を学びて其功なり大いなる鯉に乗して水上に飛行し書をよくなびくるゆへ人なりと

○大公望ハ尚父ともいひ渭濱に釣して隠れ住る仙士なり後ハ八十余歳ふ及で周の文王その賢を尋ねひ師とし武王に兵を教ゆ同武王に兵を教ゆ

○上利劔ハ劔と杖として大海の波上を飛行するゆへ人



国立公文書館
National Archives of Japan

○張九哥い宋代に都ふ居し発明ふたる草の根きるぐり帝わかしえ召て酒紙吹をひわる日ふ紙と様のうちにおかく毛と赤ぜど悪花さうるふ招ぐうりそその紙ふ

○鐵拐仙人い虚空にむうろくこぐのうちをふたいごと御とはるさうし仙人なり

○蛾蓑仙人いはるに蛾蓑紙蓑ぜるゆふ

張九哥

鐵拐仙人

蛾蓑仙人

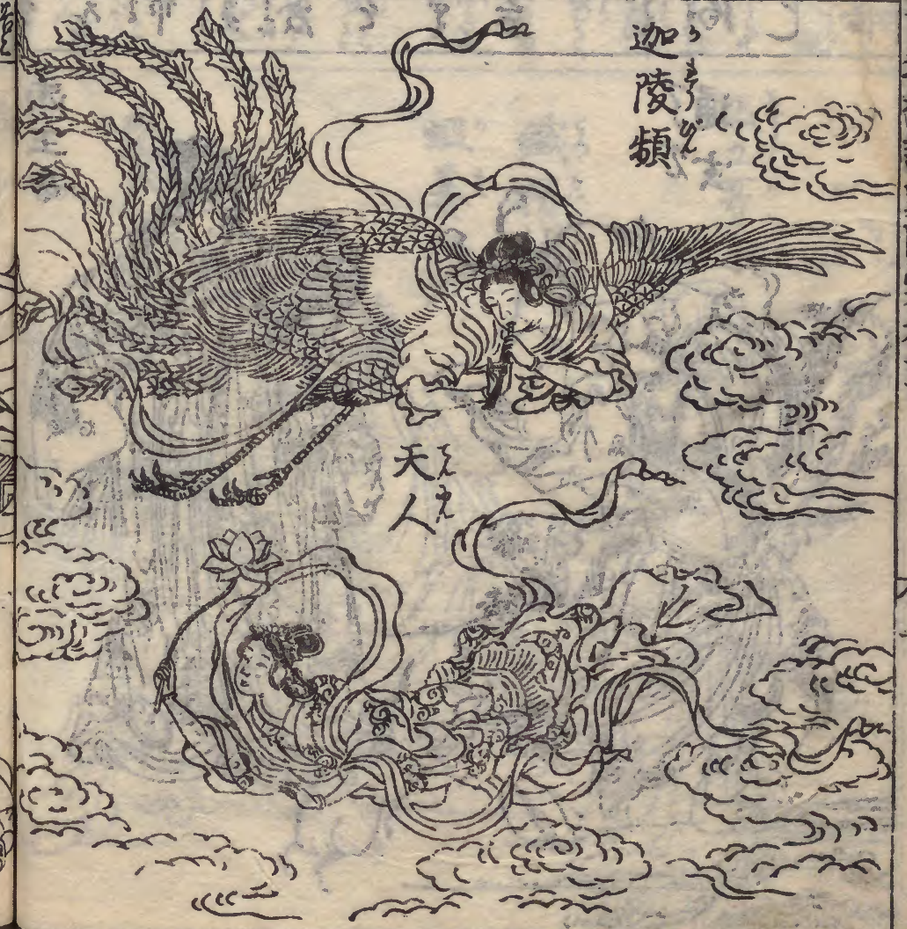
○西王母い仙女なり前漢の武帝に桃をもち味甚美なり帝核と植んと有しぐ王母の曰此桃三千年に一度花咲実のる一つ食をまい三千年の壽とさつと東方朔ぜ桃紙三つぬとと食ぜうとぐ

○通玄い張果呂しもうくひさごの中り約と出と御紙はるうし仙人なり

西王母

通玄

○天人い首の花曼
ちぐひとつ水ぶ
に姫づるどけ○こま
たたせどとゝ我
ども命終るときい
楽こつとて立裏ろ
かかしゝわり
○迦陵頻い天上の
鳥なり天人の面の
おとく美をぐもて
笑くしゝくゆ
声鳥ゑ好音鳥と
もゝり是佛経ろ



○和歌い此国の風俗
なれ三十一字れるとつ
祈如何称ちて情如
速ぶ事実とりく
を故に佛神も感應
有りこの德ゆい歌や
そを和歌い神代ゆり
始ゝこの人ども住吉大明
神とゑ歌の中神と崇め
まり夜通姫人麿赤
人と歌の祖神ととを
名授ゝ後成宗家歌
道のでゝた歌人数多在
て秀歌多し

○詩ハ唐土ヨリおこるなり故ふ書くおとゝ文詩ハ和おにはじくゝ義あり五言七言ゝて五字七字に作り絶句と律とあり人ゝ其情ハ述て人ゝを感せしめ實とあるゝを事詩ゝの二つふたゝあり

白居易あざ名ハ樂天晩年の詩人なり蘇軾字ハ子瞻東坡と号ス家の代々人

詩人
白樂天

東坡

○筆道ハ唐土の文字より漢字とゝ人晋ゝ王羲之筆法の祖なり石面ゝ書ゝもまゝ墨石ゝすゝりもゝ入ゝとゝ

日本にてハ淳和天皇弘法大師橘逸成ゝを三筆とゝ道風佐理行成を三跡とゝ行ゝも筆乃名誉後世に残ゝ其筆跡ゝ

ゝゝ園親王の筆跡ゝ家一流と称ゝて今世ゝ行ゝ

筆道
晋
王羲之

小野道風

○琴ハ伏羲の作り給ひ
し五十絃又廿五絃あり
琴といへ楽器に用を
和琴といへ又世ふ琴ゝ
十三絃の琴をしらく
琴といへ音曲をゝぶる
多くあり
○香ハ清浄潔白の徳
ある物ゆゑ禁とさゝ多
故ふ神祭仏おいて焼
かるをその香遠よりる
仏前い水ゑ入てたゞひも
よゝく沉香といへ香ハ

琴

香

○鞠ハ唐ハ女媧氏の
代に逆臣蚩尤といふ
者謀叛を企軍に及
しか女媧ゑい女帝ゆゑ
ら聖徳ゑ万民な
びき従ひ終に蚩尤を
討亡しゆひ其頭を
祭り諸人蚩尤を悪
て頭を蹴ゝり是鞠
の始とゝ鞠のうゝ
松柳柳の下を植
るゆゑ飛鳥井家雅楽
家鞠の二家なり上が
武家松下一流あり

就鞠

○目利は雲跡古画又万の器物真贋をよく見分る人をいふ古筆名品とも名付剣の目利は刀剣の真偽をわる

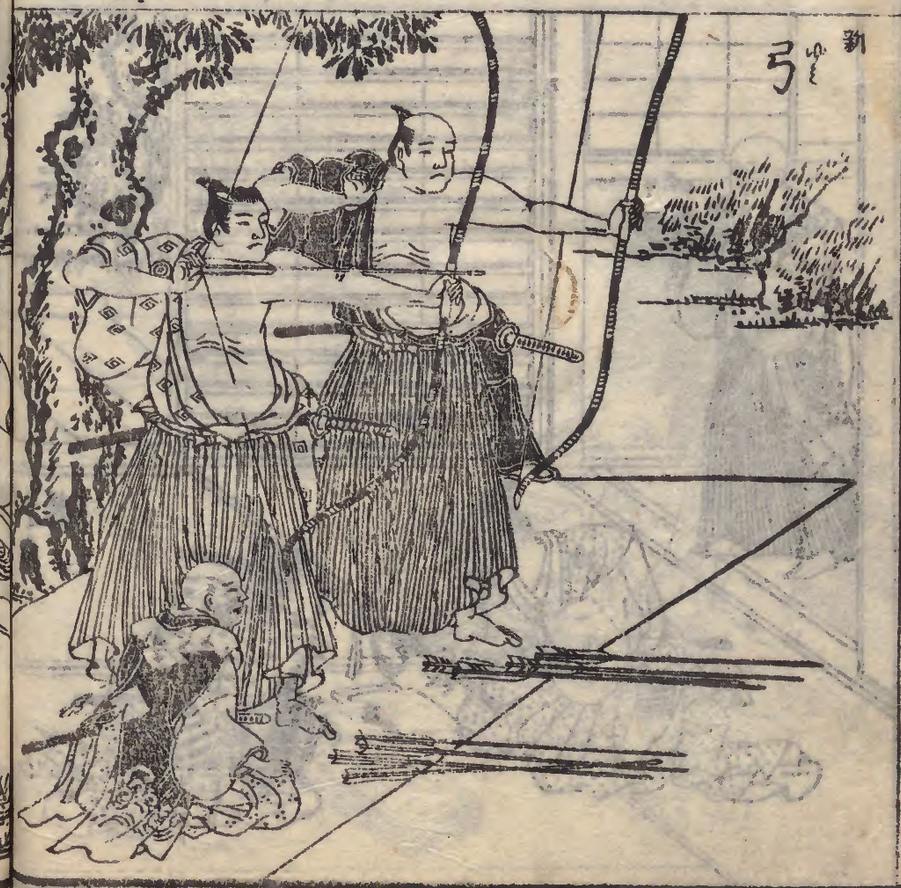
○算術は方法はつり貴賤をもふなくてかなはぬ事なり天地五運乃形色も算数を以て考へる也方里の数を知る事も皆算勘の術をもつてをこなひ日用算勘のる術わげく

○礼は人倫の本りにしたがく礼なくてかなはざる事なり聖人乃教のこゝ義とゝいへ礼楽射御書数の中にも礼を重ずるこの国も礼儀の作法は将軍義満公の比代より始まりとも小笠原家の礼とゝ流方ともいへ仕官の人の勿論の事貴人ふまじき人いまゝぐのかの長なまべかをみべき事也

○弓い射藝とゝ武士の家にはゝく人い射藝を学ぶべからず武士ハ弓馬ゝ

いつゝ唐土に楊南蔡と云弓の達人い百歩下りて柳の葉ハ射に一発も射そんじる事なしとゝ我朝ハ

おゝくい鎮西為朝統靈守教師ハ頂與市等弓の達人なり其外数多精兵の射て



○馬い素馬のはなる是武士の要乃ものゝ師ハ代ハ代ゝて初ハ人ゝゝと肝要なり功ハ者ふるゝて後る者

わゝく曲ゆゝ弱ゝ

百曲ありとゝ弱のゝ

ゝゝ曲の並ゝゝ法ハ

わゝくゝひゝゝゝゝ八条

流わり今世大坂の一流

ゝゝゝゝゝゝゝゝ武士の

要乃ゝゝゝゝゝ流儀も

たゝゝゝゝゝ大坂流

も是ゝゝ後るの徒や

○劔術は左刀右刀の法なり兵法ともいへり武士才一の乃道法儀のきわめ林乃流柳生流神新流一刀流などなり古く乃侍本業の藝と教え身の光とせり

げゝ人体多くいとき幸にわるとも今稗盛乃河代わるくい商ひ職人農人等いとゝ

新 劔術

○圍碁は周公旦作りあいと云右伝大臣入庵の時作なりと云三百六十目は年月日数に五目黒は九曜の星石乃黒白は昼夜を表せるなりとも

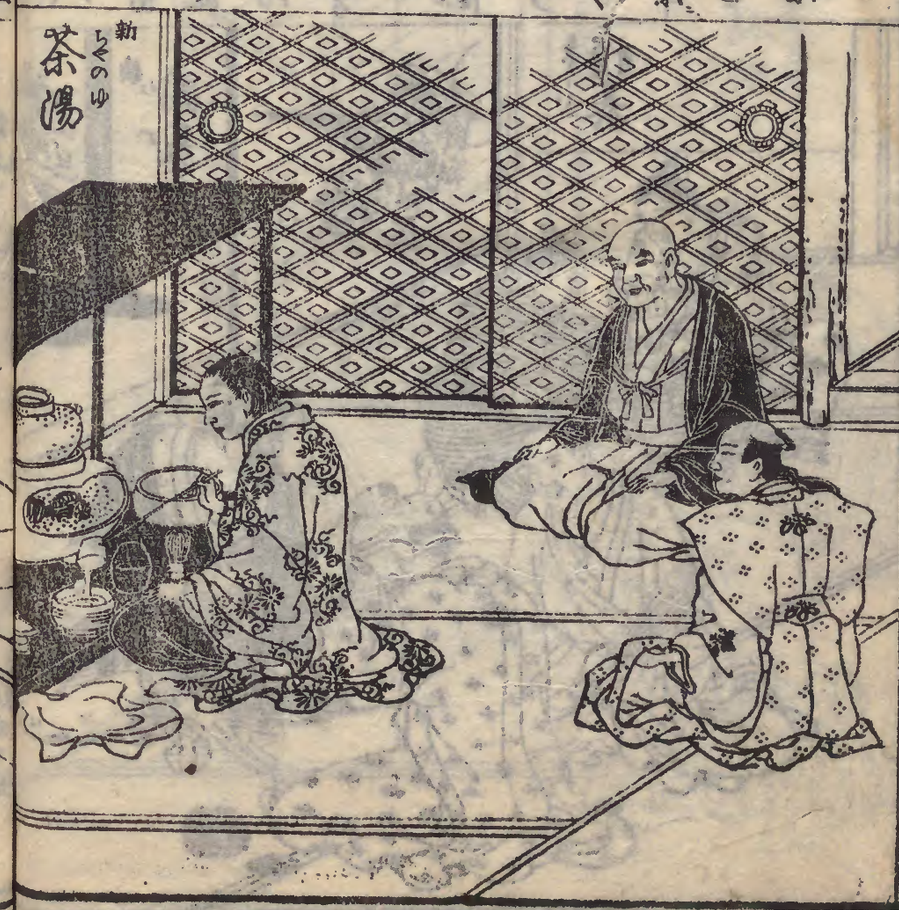
○将棋は周の武帝作下五嚴に命ぜく作りもし軍法の作とりとゞまりのあり大将棋中将棋あり今りてあとぶ小将棋といへとまりあるひわるあり

新 圍碁

将棋

○茶湯はむかしよりあるを
あるを手なれども素
亭紙数寄屋造し
草木の植やう料理
いろいろまで侘を立く
くしくなりゆく千
利休ようてゆきて
古田織部小堀遠州
ど茶道の達人其流
派わかれ人倫は
行儀とあるの一助
元来茶道は奢とた
ぶれ驕奢ぶりくを

新茶湯



○立花は京六角堂
の別当池坊立花の宗
匠なり毎年七月七日
に門弟集して立
る者猶是紙を
又抛入の俗形に師
あり今世なげ入ふ
かこのいきく花の舎
多く宜なるのみ花
い人の心ばせ
樹氣とうんどんりの
なきばかりなるゆく
先猶のものとぞ
ありてこうなり

立花

○山伏と修験道とも
いふ真言の法なり行者
滝し身をきよくして
山大山へのぼりて行人
のとなりあふ天文易
学ばまなびて法人乃
五運八卦とかいふの筋
若病の軽重吉凶乃
方角を考へまさ
一流後行者のけ代作
をろうめわ人是行者共
の生をまもる人の病を
祈祷を始験あらはす

○鷹ハ唐土五帝の時
よりと貴ぶとかの我
朝ハいにしへの神功
皇后の市代小百濱
國より始て奉られ
る其後仁徳天皇乃
市代ハ唐より奉られ
献せしを市鶴と名付
を備ふ人をもあた
まへ是奉れるのを
めでかの奉れる勇氏さ
かんにして武徳乃為
なをば武門ハ貴ぶ
ものなり

○紙いひ〜うの事かきとめ真偽とかゝ〜ど後小松院乃御宇に規世世の作とつゝ者公方家の紙を更ゆくゆくちんと敬ぬ後に今表保生金剛とゐて宝庫とゆゝり又猿楽といゝ事い猿田彦の作紙のいひゆゝとゆゝ猿い日本紀奥の注一ゆゝて神祇釈教哀三常故事世の猿すゝく表集

○笛小鼓大鼓を鼓豆とに指ゆとゆゝゆゝ笛い陳武者の時五仲俗とゆゝ鼓い秦の横笛の俗ゆゝ大鼓い湯ゆゝく吊ゆゝ小鼓い法にて様ゆゝ太法湯和合の器ゆゝ又を鼓い芙者の時夔と然一其皮とゆゝて作ゆゝとゆゝ或い云芙者出ゆとゆゝゆゝ玄女者のゆゝに夔牛の鼓と作ゆゝとゆゝ

○狂言はそのちがいまり
はやびらうかたのよ
乃万人入を幸い乳が
ぶして矣とりこふを
爲見るあるべし然と
はじく流義のうちに
わりくかしのうつ
又狂云のうちに偽板
とをるりのあらをも
狂云のかたを狂戯と
なるとて人のかたをく
ちをはつしひとおとをの
を要とうるりのう

○浄瑠璃を小型お通
小姫るお通に伝長之の
侍女るを義孔矢作
浄瑠璃姫女ぶ左文と作る
岩永拍子揃うと作く
是を浄瑠璃といふ
其ほ浄瑠璃の三つの
拍子三線に合せて曲
節とかくる又其の長の況
う浄瑠璃左文の文句
といちぐく変たり
宗大坂にた浄瑠璃
左文をくちうて名くの
流を出来せり

○三絃いえ来流林
園の樂器なるよし
三味線とも書かり
近世繕園とりぶ此三
絃をりそわそぶ事な
なう左婦姦ふれわれ
ども朔ふにおかく自
南かの芸かり故り名
月花の樂をその余乃
枝奥いづ三絃をりて
一曲書要しをを又小弓と
いふりのい三絃ゑを作り
出せるりのなるべし

○芝居の其おこりは
河原の芝にこもかんど
を敷わしてねをと
かしなるりのみて今の
敷下しなるはし新
のわかりしゑ才にる
工ふなりく衣服装
中そも花笑と直しそ
立役女形敵役なりく
そをくに役をりけそ
三ケの津にい常芝居
をゆこりを諸人の到が
とかりねりく芝居
とえびをゆりぬ

○人形芝居はわやつるをもつて人をわるくせるをつうじ一事ゆゑ加者出て今ハ月雨よりそこ〳〵きと夕と事生わるがごとし雅俗作か豊作の長芝居とりとをよくわきまへさわうゑ雅俗ゑ作田とゑ町くつゑ人形の芝居わり好ゑ細工でかしてゑ人の目ゑかどろくとゑとの上

○輕業いひしうしう其侍わろ事ゑ治とちゑ微小発き面白ゑをとも〳〵合〳〵絵のごとくくゑ上〳〵わきまへ出く人の見物ゑ絵ごとゑ

とちゑとちゑやくもとまて輕我ゑ絵かとりのゑ

きさん左ゑとゑ匹りの一つつゑとこそう治ゑ

ゑんを輕ゑをさゑをすべて世侍ふきゑるんとゑゑ初雅の時ゑう仕ゑをさゑんゑ

ゑうゑとゑのゑ

国立公文書館
National Archives of Japan

○絆和いえ祖宮也上
人ゟ下ゟ京ゟ也童の
間に住居して茶釜を
けづり作業ゝを十二
月十三日ゟ京町中と
賣わりく正月大ぐの
茶釜をそこの例して
て求る事ゟり

○鹿嶋の事鯛といふ
い毎年甚麻殖大明
神其人の吉西人ゟの
身の上五穀の吉悪を
神託する仏備國へ鯛

○猿舞ハ始りたる
ゟ今京都へ
来るハ伏見の名ゟ
出るゝ年乃始ふ
御所方へ嘉例と
てよるとめでたき事
と尊しむ又田舎ゟ
牛馬と飼ハい秋入の
時分きとゝのゝるにと
て猿ちひとゝ其故い
猿いゝ山乃父と称しるい
山のぞとゝ山ゝゝ
わゝのゝ称とゝ書に
見へゝう

○万歳ハ年の始ゆぞくの例とて祝ひて
[illegible]
[illegible]
[illegible]

以哉。從寛文逮今。殆百幾十年。版已就刓缺。今茲寛政己酉。顧田氏主人。囑下河邊氏。移寫舊樣。再刻剞劂。而精工縝密。視舊有信爲。刻成。請余以一語。冠諸卷端。近有春朝齋山城名所圖會。亦以圖繪之故。盛行乎世。朝摺暮印。洛陽昏貴。彼實不過一卧遊之具而已。然且見賞如斯。況之大有益之書。非徒供於目翫也。則必與彼並駕而超乘過此。如指諸掌。余預爲顧田翁。作賀。翁至記。而驗之。

己酉四月　春莊端隆

國立公文書館
National Archives of Japan

寛政元年己酉三月吉辰　出来

皇都書林　九皐堂　壽梓

訓蒙圖彙 大本	全八冊	村上勘兵衛
同本小本	全四冊	出雲寺文治郎
同增補頭書	全八冊	今井七良兵衛
同增補頭書大成	全十冊	頭田正三郎
寛政元年出来 同増補頭書大成拾遺	全五冊 嗣出	勝村治右衛門 泉屋吉兵衛
三才千字文 訓蒙図彙の目録を抜中として文字を次ゆるに従ひて編次せり		小川太兵衛門 小川源兵衛 谷口勘三郎

国立公文書館
National Archives of Japan